

会議録（要点記録）

第4回堺市南区教育・健全育成会議	
開催日時	平成29年10月13日（金）午後6時00分～午後6時58分
開催場所	南区役所 2階 203会議室
出席委員	中村会長・大台委員・外村委員・竹井委員・三木委員
事務局職員	南区役所 石井区長・隅野副区長 金岡課長・吉田課長補佐・船津主幹 内山係長 和田相談員・前田相談員・田中相談員
議題	1. 開会 2. 議事 平成29年度南区教育・健全育成会議中間報告について 3. 閉会
配付資料	【資料1】平成29年度南区教育・健全育成会議中間報告について（案） 【資料2-1】平成29年度全国学力・学習状況調査堺市結果（小学校）【抜粋】 【資料2-2】平成29年度全国学力・学習状況調査堺市結果（中学校）【抜粋】 【資料3】幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント】

審議状況

開会（午後6時00分）

1. 開会

事務局

定刻になりました。ただいまから南区教育・健全育成会議を始めます。本日は、何かと御多用のところ、御出席を賜り、ありがとうございます。

本日は、全委員の御出席を賜っておりますので、会議が成立しておりますことを御報告いたします。

本会議は公開とさせていただきます。なお、会議録を作成するにあたり、正確を期すためにも議事内容について録音をさせていただきますので、御了承いただきますようお願い申し上げます。

それでは、案件に入らせていただきます。この後の進行は、中村会長にお願いいたします。

2. 議事

中村会長

これより私が会議を進めてまいります。

まず平成29年度の審議事項について、議事に入らせていただきます。

最初に事務局から資料の説明をお願いいたします。

事務局

（資料2-1、2-2に基づき説明）

中村会長

本日ですが、中間報告を提出することになっており、案として作成いたしました。本日は、これから40、50分ほどかけて、この中間報告の内容を確認しながら、抜けてる視点、あるいは特に盛り込みたい内容等があれば、御意見いただきながら取りまとめていきたいと思っております。今回の命題ということで、各地域における教育健全育成に向けた取組の中でも、学習意欲の向上と生活習慣の定着の2点に絞られており、こちらに対して我々としても見識あるいはまとめというのを提示し、方向性を共有する必要がありますので、これらの視点を踏まえて、現在出ております中間報告等について、意見を交わしていきたいと思っております。

事務局からもさまざまな資料をいただいております。平成29年の学力・学習状況の調査では、堺市について、小学校と中学校で改善の傾向が見られるという報告もあります。これらの学力そのものの問題とこの審議事項の中の学習意欲の向上をどのように結びつけて考えているかということも非常に重要な論点のように思います。まずは竹井委員にお伺いしたいんですが、今回の平成29年度の学力・学習状況調査を踏まえての率直な感想というか、長く教育現場でいらっしゃって、この全国との比較の中で、語られがちな堺市の子どもたちの学力の状況についていかがですか。

竹井委員

よく言われていたのは、基礎的・基本的な事項はある程度クリアできているけれども、論理的な思考だとか、それから想像性を働かせての問題解決になってくると難があるというようなことで、特に算数を中心に発言させていただきますが、授業の流れ方そのものを見直してまいりました。知

識技能を中心にする学習、これも大事なのは踏まえながらですけれども、課題解決的な学習、大体流れが決まっております、課題に対して自分で考え、自力解決を行い、ほかの人がどんな解決の仕方をしているかということをしていろいろ議論し合って最後に結論に持っていくという、それまで、初等教育研究会算数部でやっていた授業の流れが、ホームページで堺スタンダードとして、全体的に広がっていると知りました。とてもうれしく思いました。国語科については、読書もそうなんですけれども、長文を速読して意味をつかまえるというところがとっても弱いんです。どうしても国語の授業は感想が中心になってしまって、学ばないといけない国語的なポイントもあるんですけれども、それよりも物語文の全体のイメージだとか、心豊かに読み取るとか、そういうところの発言や捉え方が多いのかなと。教師もそれを求めることが多いのかなと思ったりもします。もっと一つ一つ国語ハンドブックに書いているようなポイントを、算数科で一つ一つクリアしていくのと同じように押さえていく時間も必要なのかなと思うんですけれども、なかなかそこが難しいかなと。それが学力調査にもあらわれているのかなと思いました。だけど、みんな課題として各学校では取り組んではいらんです。これは平均値ですので、なかなかそれぞれの学校によって違いがあって、一概には言えないと思うんですけれども、そういう印象を一つ受けました。

中村会長

竹井委員をはじめ、堺市内の教育関係者が非常に努力をされた結果も十分に今回の結果にもあらわれてきているとも思えますし、ただ、最後のお話のように、あくまでも平均値ということで、やはり課題を抱えている子どもたち、学校、地域というのもあると思うんですよね。その中で、引き続きこの学力の問題というのも取り組むべき大きな課題のように思いますが、この中間報告との兼ね合いで考えた場合、学校教育の教育的な学力の向上というのはもちろんめざしながら、やはり学習習慣というところに主眼に置いていく必要があるかと思うんですよね。このあたりとの関係性は竹井委員どうですか。

竹井委員

この中間報告を見せていただいて、学習習慣という言葉がないなと思いました。学習意欲の向上に入れるのか、生活習慣の定着に入れるのか、よく私たちが基本的な生活習慣・学習習慣という形で続けて言いますので、ここをもう少し言語化していかないといけないなと思いました。

今の質問からは離れるんですけれども、私なりにこの中間報告についてまとめてきました。このアプローチの点ですけれども、保護者自身が健康的にいきいきと生活するためにと、子どものために保護者が大切にしたい事、この2つの視点はとても大事だと思うので、それを中間報告の1番上にはっきりと明記して、それから学習意欲の向上、生活習慣の定着という形で書いていったらいいと思いました。それから1番初めに書いている総合的な学力なんですけれども、堺市の場合は、教科学力、社会的実践力、学びの基礎力というこの3つの言葉で表現して、それぞれに社会的実践力の中に問題解決力があったり、学びの基礎力の中に豊かな基礎体験があたりします。ですので、その学力観を踏まえた記載をまず書いておいて、その次に学習意欲の向上について、いろいろ考える内容にポイントを当てていったらいいと思いました。

その一つとして、勉強に限らず小さいころから何か夢中になる経験が、多様な学びの動機づけにつながる、日々の親子の会話や体験を通して子どもの興味、関心を育てることが大切であるというような言葉、それから学習意欲の向上というのは動機づけと努力という言葉、そういうポイントとなる言葉を考えて入れていかないといけないなと思いました。

中村会長

この学力観という言葉も、なかなか難しいところですよ。つまり、学校教育現場で言われているような学力観、そして私たちがめざし、今回まとめようとしている学習意欲の向上の部分、ここをどういうふうにつなげていくのかというのは、御指摘のように丁寧に盛り込んでいかないと、単に今日のお話のスタンスが学力調査からスタートしているので、ともすればこの学力観イコール学習の調査の結果に反映させるような、そういう方向に行きがちなんですけれども、ここは注意をしながら議論をしていく必要があると思います。

竹井委員

学力と言った場合、教科学力をまず考えることが多いと思うんです。でも、教科学力を上げることが、子どもにできる喜びとか、わかる喜びとか、この問題が解けたから、テストで何点取ったから自分は勉強ができて満足感があるとか、そういうことに行きがちで、親も点数だけに視点を置きがちなんですけれども、学習意欲の向上って広く言った場合には、そういう教科学力だけじゃなくて、もっと基礎になる意欲、関心、態度だとか、興味を持つとか、関心を持つとか、子どもは興味・関心を持ったことは、親や周りが何を言っても言わなくてもどんどん努力していきますので、その素地を、好奇心旺盛な子どもを育てていくことが、堺市が言ってる総合的な学力を上げていく1番の基盤になっていくのかなと思うんです。おもしろがる、好奇心を持っていろいろ聞きたくなる、そのためには学校に入ってからじゃなくて、小さいころから親子での会話とか、いろんな体験とか、それはスポーツでもいいんですけども、通じて、そういう機会を持っていく。何かに夢中になれる体験・経験がある子が小学校に行ったときに、そういうことがまた新しいものに向かって意欲的に進んでいくことができる素地になるんじゃないかなと思いました。そういう意味で小さいころから何かに夢中になる経験が多様な学びの動機づけにつながるっていうことを書いたわけです。

それと、家でも、学校でも、地域でも、子どもはいろんなことを学びますし体験します。その中でやったとか、できたとか、わかったという喜び体験とか成功体験の積み重ねが学習意欲の向上につながる。ただし、学習意欲の向上につなげるためには動機があるだけではだめで、やはり本人がいろいろ努力をしているようなことができるようになることと、それから何かを知りたい、何かをわかりたいという、自分で問題を解決していこうという問題解決力、それから一つ一つの努力の積み重ねとは相関関係があつて、別々に話すべきものじゃない、合わせての学力だと思ったわけです。

中村会長

冒頭からぐっと入った議論になりましたが、外村委員、今の議論を踏まえても結構ですし、この中間報告ざっと見ていただいても、学力のところから今回スタートしているんですが、一旦離れていただいても、広く議

論を戻しても構いませんので、よろしくお願いします。

外村委員

親の視点から考えますと、では、その学力を親はどうつけてあげることができるのかと考えました。そうすると、私たちがめざすものは、それを保護者の方々にどんなふうに伝えていけるのかということかなと思います。子どもころの体験が重要だということが一つあるとするならば、かかわりの重要性を盛り込まないかということになりますし、既にその時期を逸してしまっている親御さんでも、いや途中からでも大丈夫だよと。それが幼少時、つまり学校に入る前のかかわりでないとだめだというのはだめやと思うんですね。そうではなくて、今からでも明日からでもできるんですよというようなものを盛り込んでいく必要があって、そこを踏まえての議論というか提示であるならばとても心に響いてくるのかなと思います。なので、その辺の概念というか抽象度をかなり下げないとわからないと思います。

中村会長

私も本当に同感ですね。幼児期の大切さというのは今どこを見ても出ているわけですよ。例えば最新のものと言いますと、先般10月10日にスポーツ庁から現在の日本人の体力のレベルがどうかという公表があり、2016年度のデータが発表されているわけです。それを見ますと、子どもたちの運動習慣というのは幼児期の運動習慣に依存していると、はっきり書いてあるわけです。つまり幼児期によく運動している子どもたちというのは、小学校に入った後の体力のスコアが高いと、はっきりとデータが出ているわけですよ。そういったエビデンスは一方では大事であると。しかし、外村先生がおっしゃるように、じゃあ幼児期を逸した人にとって、その話題はどれだけ響くかというのはすごく重要な視点で、逸したからもうだめなんだではなくて、今からでもできることとしての提案事項という視点がないと、なかなか自分に関係のある話として聞いていただけないんじゃないかといったこともありますね。非常に重要な指摘だと思います。

三木委員は、心理学のお立場から、ざっと今回の中間報告を受けてどのような御感想をお持ちですか。

三木委員

生活習慣についてですが、スクールカウンセラーとして親御さんと面接もさせていただいて、例えば不登校とか、家庭内の暴力とか、子どもにどうかかわっていいかわからないという親御さんで、カウンセリングに来ていただける方は、カウンセリングに来ようとするだけ何かしてあげたいというのがすごくあって、こんなことも試したし、いろんな本も読まれたりとか、いろんな集まりにも出たりとか、すごい積極的にされてる方も多いんですが、親御さん自身が子どものために、これをすればいいだろうというところだけに目を向けてしまっていて、ちょっと頑張り過ぎている。子どもにとってすごくプレッシャーに、親がこんなにしてきているんだから僕は何か結果を出さないといけない、でも結果の出ない僕はやっぱりだめだというような、マイナスの循環になっているケースも多いんですね。なので、そういう親御さんにはこれをしようという足し算よりも、ここは少し子どもに任せて様子を見てみましょうとか、頑張りないことを頑張り

ましようみたいな引き算の話になっていくんです。お母さんが面接に来ることが多いんですが、お母さん自身の趣味の時間や、落ちつく時間とかありますかというような質問もよくするんです。大抵の場合、家事とか子育てに追われて私の時間は何もありませんという返答が多くて、親の役割をきちんとこなすためには、自分自身の生活、その人の心の余裕といいますか、お母さんではなくてその人自身になれる時間というのはとても大切だと思います。なので、保護者向けの7つのやくそくを考えていく上において、親自体が余裕の持てる生活習慣を何か提案できる言葉があるといいなと考えていました。

中村会長

三木委員の指摘は本当に難しいんですね。今回のやくそくの中でどこまで盛り込めるかということもあろうと思うんですね。特に、今のお母さんのお話なんかもありますけど、忙しい中で自分の時間が取れなくて子どものために一生懸命やる中で、エネルギーがどんどん低下しちゃう、そういう状況もあるし、受け手側の子どもからしたら、先ほどのお話のように期待にこたえたいけどこたえられないという悪循環もあると思うんですね。

私も健康科学が専門ですから、先ほどの体力のデータに戻ってしまうのですが、例えばお母さん世代が30代後半とか40代前半なんですけど、体力の低下が激しいんです。運動する時間がない。生活習慣、運動習慣を高めようと言っても日常的にそういう時間が取れないというのが現実的に体力の問題として出てきていると。そんなことを考えますと、どうやって大人の時間をつくるのかみたいな議論にもなってくるとも思うんですね。

一方で、余談ですけど、ここ数年、子どもの体力は少し改善傾向ですね。高齢者に至っては、どんどん元気になっている、体力がどんどん上がっているんです。下がっているのは30代後半の女性なんです。ここと我々の議論はもしかしたらどこかでつながるような気がしますね。

大台委員、今回、中間報告をまとめるに当たって、率直な御感想、これまでの議論も踏まえて御意見いただきたいんですが、いかがでしょうか。

大台委員

中間報告を読ませていただいて、保護者自身が学ぶ喜びとか、一緒に学ぶ体験を共有するとか、保護者が生き生きとや、保護者自身が余裕を持ってということですか、本当に大切なポイントが盛り込まれていて、これをもとにしっかり、どんなふうに伝えるのかというのは本当に大事だなと思っている中で、わかっているけどできずに終わってしまうのは本当にもったいないなと思います。これを見てちょっと肩の力が抜けて楽になったわと思っていただけるようなものをつくりたいなとずっと思ってまして、今、一生懸命されていることの意味づけとか、やって当たり前と聞いていたけど、こんなにいいことをやっていたんだと思えるようなことなどから、何かちょっと力が抜けたりするんじゃないかなと思います。大変なことを提示するんじゃないかと、今やっていることの意味とか、それこそ保護者へのフィードバックみたいな意味もあつたらいいんじゃないかなと思います。どちらかという、子どものためにとって思い過ぎるのではなく、一緒に、子ども自身が親をモデルに、いろんな姿勢やいろんな喜びを学ん

でいったりできるような指標になればと思ったりします。あと、私自身もいろんな家庭の話を聞かせていただくと、保護者は一生懸命頑張っていたり、そうじゃないように見える状況の方と出会うこともありますし、学校の先生方から、保護者がいま一つお子さんのことを考えてないのではないかとか、もうちょっと見てあげてほしいとかいう話を聞くこともあります。話を掘っていくと、以前はすごく頑張っておられた時期があったり、こんなに自分は頑張っているのに成果が出ないとか、子どもにちゃんと伝わらないとか、子どもは子どもでそういう頑張りを求めていたんじゃないかと、そこのマッチングがうまくいかないと両方しんどくなってしまう。しんどくなったら子どもは前向きに学習できなかつたり、学校に行けなくなったり、勉強に向かえなかつたり。保護者がそういうしんどさを感じると、いまいち養育に力を入れることができなくなったり、子どもの学習を諦めてしまったりしていることもあると思うので、マッチングがすごく大事だなと。

そういう意味では、先ほどからずっとお話ししている今やっていることの意味づけって、そういうことにもつながるかなと思って、当たり前に行っていることって実は子どもにこんな効果があるんですよとか、きっと保護者の方は子どものために子どもに何かしようと思えますけど、自分が生き生きすることがこんなにも子どもにいい効果があるんだというのを感じていただいて、私自身の活動から感じることは、三木委員と一緒になんですけど、頑張り過ぎなくていいんじゃないかと。自分の時間や自分の人生というところも大切にしながら子どもと楽しく生活するのが何より大事じゃないかなというところが伝わって、少し気持ちが楽になるような7つのやくそくを提示できたらいいなと思いました。

中村会長

非常に重要な視点だと思いますね。あれもこれもとプラス・プラスのやくそくを追加して、読めば読むほど苦しくなるような、そういうことじゃなくて、意味づけとか、あるいは裏づけとか、そういったものが提供できるような7つのやくそく、もうやっていることの視点の提供みたいなことであるならば、結構ずっと入ってくる可能性がありますね。

親は一生懸命してあげたい。でも、どうしてもやり過ぎてしまう。その限度がわからなくなる。あるいはそれによって子どもたちがしんどくなってしまうようなこともあろうかと思いますが、根っこには、この会議、もう3年目になってますけど、やっぱり子どもとの共有体験とか、共通した経験みたいなもの、親子での共有体験の重要性を提供していければいいんじゃないかなと。

先日ある堺市内の小学校の先生とお話していたんですけど、7つのやくそくの中で、例えば親が充実した人生を送るということに余り寄り過ぎると、逆に親が満足すれば同時に子どもは満足するののかという、そんな問題も一方で出てくると思うんですよね。ですから、そういう中で共有体験というか、親と子どもと一緒にやるのが一つベースにありながら、今やっていることに対しての意味づけというのが進んでいければいいのかなと先生方の話を聞いていると感じるところではあります。竹井委員から一言コメントをいただきながら、今日、中間報告をまとめ、7つのやくそくに行きたいんですが。先ほどの学力の問題もありますが、学力、学習意欲の向上と生活習慣の定着の根っこに、子どもたち自身が、好奇心とか関

心、そういったものも高め、そもそもの学びに向かう力といったものをどうやって地域とか家庭が後押ししてあげられるのか、これは親の視点というよりは子どもの視点で何を学んでいるのか、段階的に、そういった視点もすごく重要になってくるのかなと思うんですが。

竹井委員

いつも思うのは、子どもが好奇心を抱くその玄関というのは「楽しかった」やと思うんですよ。先ほどは小さい子を焦点に当てたみたいな話をしましたけれども、その楽しかった経験というのは家族でいろいろできると思うんですよ。運動であり、旅行であり、あるいは読書であり、同じことについて話し合ったり、そんな楽しいという体験が一番根っこにあって、そこから子どもがあるモデルを見たときに自分もやってみたいなどか思うんじゃないかなと思うんです。

先生方の話を聞いて、肩の力が抜けるようなとか、親自身が自分のことを肯定できるようなという視点、確かに大切だと思いましたが、私自身がいろいろ中間報告を見ながら考えてきたことはマイナスよりもプラスが多いです。読書にしても注文をつけるような内容が多いと思います。そこをどんなふうに表現していけばいいのかなと思ったりもするんですが。

普段の生活の中で保護者の人に言いたいことは、ああしなさい、こうしなさい、勉強しなさいという命令的に強要するのではなくて、子どもとの約束が前提になるんですけども、今何時だよ、というふうに、時間や事実を伝えて子どもに行動を主体的に判断させるような言葉かけです。それはもしかしたら御家庭で保護者の方が意識的にやってらっしゃるかもしれないですね。それから、子どもが頑張ったときに褒めてやるとか、その大切さだとか、日常的にやられていることを後押しするようなことになるかと思ったりもしますが、読書習慣については、今これはマイナスなので、やっぱり保護者の人にはプラスで認識してもらえようかなと書いていけないかなと思います。子どもが学習に集中できる環境づくりというのも大事だろうと思うんですけども、それもある程度子どものことを考えて保護者が協力をしていくことが大事ではないかな。テレビを消すとか、スマホとか、スマホゲームとかは子どもが気になるので、影響を考慮して環境づくりをするということもあると思うんです。そういうことをうまくまとめられたらいいかなと思うんですけども、プラスの視点とほっとする視点、安心する視点が大事だなと思いました。

中村会長

竹井委員がおっしゃることも、三木委員や大台委員がおっしゃることも、一見逆のことを言っているんですけども、行くべき方向は一緒かなと思いますね。竹井委員も、あれもこれもと言ってるわけではなくて、包括的にするべきものというのはやっぱり押さえておくべきだし、だからといってそればかりに走ることの危惧というのも、議論の中にあります。

三木委員

7つのやくそくということで、何か指針や、こういうかわり方がいいかわりなんだなという目標になるようなものが掲げられ、そこで裏づけもちゃんとついていると、保護者の方もしっかりわかると思うのでいいのかなと。その中で、ただやり過ぎてしまわないような、ちょっと安心できる

もの、そこがうまくミックスできるといいのかなと思います。

中村会長

何でこの議論がこれだけ一見離れているように見えるのか、ずっと考えてたんですけど、学校で今言われている新学習指導要領の中にもありますが、何を知っているかというところから、何ができるようになるかに変わってくるわけですね。いわゆるコンピテンシーと言われているものです。子どもたちに何ができるようになるのか、実感を持たせて学びを深めていくということをいっているわけですね。学校教育としてはもちろん、最終的にできた実感を持って次のステップに行く、これはこれで重要だと思っし、竹井委員がおっしゃっているのもすごくよくわかる。

一方で、三木委員、大台委員がおっしゃっているのは、僕なりの解釈でいうと、学びそのものを逆の視点から捉えて、外的な要求に対してこたえていこうというものだけが学びではなくて、子どもたち自身がその内的な要求に支えられた学びみたいなものもあるんじゃないかという、そのスタンスの違いがあつてのことなんかなと思うんですよね。

大きな意味では学びには違いはないと思うんですが、大台委員、いかがですかね。

大台委員

中村会長のお話伺って思ったのは、全然エビデンスもなく、ただの希望かもしれませんが、根本的に子どもって知らないことを知ったり、できないことをできるようになるのはすごいうれしいと思いますし、それを求める力つてもともとあると思うんです。それが、多分、経験の中で危ないからやめなさいと注意されたり、うまくできなかったことを怒られて失敗したらあかんのやと思ったり、多分こう小さくなってしまったりというところがあるのかなと思います。そういう根本的に持っているような欲求は、竹井委員がおっしゃった好奇心というところと一緒になんかなと思うんですけど、そういうところを表現できるような家庭や、大人とのかかわり、生活の中で子どもが感じれば自然と学ぶことができ、それだけじゃしんどいので、学び方とか、頑張っていることを周りがちゃんと認めて、見てあげているよと伝えたりしないといけないと思います。根本的なそういう欲求みたいなことが表現できるようになったら、自然と向上する部分もあるんじゃないかなと思いました。

中村会長

それぞれの役割つてあるんかなと思うんですよね。学校、地域、家庭のそれぞれの役割。全部が全部同じ役割の中でやるのではなくて、学校は学校でコンピテンシーで走る、これは学習指導要領の資質能力向上、何ができるのかというところで行くことになっていると。だからといって家庭や地域に何かできることを求める必要は必ずしもない、学びというのはそんなに簡単なものではないというのが、今日の議論の中でもかなりあぶり出されてきていると思います。

外村委員

ちょっと離れてしまうかもしれないんですけど、親つて父と母といるんですよね。先ほど聞いていた頑張り過ぎる親つてきっと母親なんじゃない

かなと思うんですね。そうすると、父と母というところをもう一度考えていくと、母親は、私も母親なので、どうしても走って行ってしまうんですけど、父親はちょっととまってくれて、案外、論理的だったりするところがある。どっちにも語りかけられるようなものをつくっていくことで、親って1人じゃない、1人の方もいらっしゃいますけども、1人の方でも地域がいると考えてもらえるような、1人で頑張らなくていいと思えるようなものができたらいいなというのが今思っているところです。何となく、男の人は論理的にわかりやすいところがあって、女性はどちらかというところと感情でわかるというところがあるので、うまくミックスされたような、論理的であり、また感情にも訴えかけるというものができればいいのかなと。私1人で背負わなくていい。私だけが頑張らなくていいって思えたらいいなと思います。ですので、力を抜けるところは抜いて、ここはわかっておいたほうが私たち親としてのエビデンスになるし、問題に向かっていけるというようなところがあるものができたらいいなと思います。

中村会長

難しいことを聞いているので、7つの親のやくそくを考える上で、今日の話を受けて、この後も議論を深めていきたいと思うんですが、立場はある程度明確にしていく必要もあるのかなと感じるところです。つまりごった煮的なものというよりは、区教健としてはこのスタンスできたなというもの。プラスとマイナスの話なんかも出ていますので、プラスで必要なものもあれば、いや逆算でいいよ、あるいは今やっているようなのでいいんだ。いずれにしても、どこかにスタンスを置きながら子どもたちの学びを補完できるような言葉が出てくればいいんじゃないかなと。

外村委員がおっしゃられたのは、親、保護者のストレスのマネジメントですよ。三木委員のストレスマネジメントのところかなと思いますので、この7つのやくそくの中で、やくそくに縛られるんじゃないで、うまくストレスを解消できるような文言であったり、あるいはストレスを和らげるためのリソースをどうやってつなげていくのかみたいなのところも、もしかしたら保護者がしんどくならないような一つの手がかりになるような気もいたします。

取りとめのない非常に難しい議論ですけども、難しいことをやろうとしていることに喜びを持ちつつ、何とか取りまとめていきたいと思います。本日、この中間報告についてはまとめられそうな方向性は見出せたかなと思います。あと半期ございますけれども、何とか7つのやくそくの策定にこぎつきたいと思っていますので、引き続き御尽力いただけましたらと思います。

3. 閉会

中村会長

本日の案件は以上でございます。委員の皆様、ほかに何かございますでしょうか。

なければ、これをもちまして本日の会議を終了させていただきます。

議案内容に対する意見や何か不明な点などございましたら遠慮なく事務局へ申し出ていただきたいと思います。委員の皆様には貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。

事務局

皆様、本日はお忙しいところ本当にありがとうございました。
次回の会議の開催につきましては、また改めて日程調整しまして文書で御案内いたします。

以上で終了させていただきます。どうもありがとうございました。

閉会（午後6時58分）